宇治大納言源隆國卿漢

於澤先生考訂、纂註

今昔物語

和朝部前編十五卷

京師 書林 柳枝軒新鐫

書肆 仙加本屋 名古屋

考訂今昔物語叙

うけたまはるみ宇治大納言源隆國と申人おはしませり。これは醍醐帝の皇子西宮の大臣高明公の孫にまします。權大納言俊賢の公の次男なり。後泉帝につかへまつりて寵遇をこうむりたまへり。人を好むこころ世にすぐれたり。

[illegible]紙屋くいかれしに
ゐて。それをうしなひ失ひて。尼
ぜうとなりて紙ゐまうしに。字治の
別業にすむこと。道のうきいとを
茶店をうゐて。往来の人をまねて
おくさ物語をせさせて。平親乃叔
事天仁二年四月廿五日。冥府

ゆう勢。書部して。絵にうこばくの
冊子をなをうゐ。其へけ[illegible]ゐ。今昔と
出をうゐ紙もんく。こ秋を物語の号
とせう作者ゐ名みよんで。又字治
物語とも喝ゐ。もうを後。其のと
をうゐ紙ひろうゐ紙。字治拾遺
つとなゐ。もうゐ。於是いと紙

おもしろくあるべきものなり。しかるに、書いまうづ
しあるべきなり。編輯したるこの人、
百年ばかりなるべし。謄写したるに、
うるさくなりて、文字脱落し、趣意
つうじ難きもの多し。舊記のか
くのごとくなれば、誰ぞこれを嘆ざ
ることや。京師山科林郷枝軒戸水

はぶくべきをはぶくべきを、
しかるべきを、はぶくべ
きをはぶくべきを、
しかるべきを、
書写したるに、
東山こざむ
しとあるべきなり。愚意とかくのごとし。
ちなみに思ふに、善
諺なるべしとかくのごとし

享保五年五月朔日

肥後隈本

井澤信長秀

考訂今昔物語の例

一は書のはじめ三十巻。中ごろ六十巻こん。
其六十巻いはゆる部三十巻。天竺部十五巻。
震旦部十五巻。とぐて六十巻なり

一は書編輯年久しく。謄写うつしくわるびて。
文字紙あやまり。おろいい脱して。誤義ゆるしがた
くなりぬ。おろ紙もんく。舊記實録を援て
これを正し。往と註を加へ事詳らす。爾て諸
ごとくものい。舊文と校と
ぶ日記載ところの人。世系官位年月。舊記實録

り天くらゝ。あの紙ばに其下に詞ゝ。觀覓おもしろく。

一ゝ書ものゝ名の西乃人。出自とわつらはし。字勢

伊勢家とものゝ。藤原忠房のゝとゝる類也

一人をもつく二人とゝ。けりあり。基俊賢蓮ゲ

ぐひなりゝ二人ともつく一人てすりあり。權中納

敦忠。土御門中納言のゝぐひなり。各系圖實錄

をもつてゝこれを訂と

一ゝ書。舊本。仁俊名とゝつく書とゝ。ゝ〻呂波

字紙もつくゝこれを記と

一ゝ言ゝ載ゝおの事。著聞集。宇治拾遺。十訓

抄名ゝ出ゝゝ紙ばゝ。皆略ゝて記ゝ

一ゝ書性異傳。古人乃逝るとゝゝゝぐゝくの

ぐゝれゝゝゝゝる人取捨ゝ紙はくべ

一ゝ書數奏。ゝゝ刻ゝゝゝ。ゝ故ゝ。日本紀

三十卷乃内。十五卷と梓行。其餘乃十五

卷ゝゝ。天竺震旦部ゝ三十卷をゝ。逝ゝゝ秘を

抜ゝくべ

宇治隆國系圖

○醍醐天皇――高明親王 賜源姓正二位左大臣 號西宮

俊賢 高明公二男權大納言 正二位

顯基 權中納言 從三位

○隆國 初名宗國。叙爵任侍從之後。寛仁二年改名隆國。歴任。而長元七年七月任參議。叙從三位。長暦元年十一月叙從二位。長久四年九月任權中納言。寛平四年二月

沿暦三年二月更任權大納言。性質既人に異なり暑氣故朝叅之暇。盛夏為納涼。尼趣宇治別業構茶店於道傍。常招往還過客。使啜一甌之茗。聚其所談。或本朝故事。或天竺震旦雜話。悉皆抄之。號今昔物語。或曰宇治亞相物語。而後輯其所漏者。號之宇治拾遺物語。實可謂修史之資也。

保元年正月辞任。同四年七月九日卒。自義保四年至享保五年。六百四十一年歟

隆俊 中納言　俊實

隆綱 左中將

俊明 大納言　能俊

今昔物語全部六十卷

○日本部 三十卷
○天竺部 十五卷
○震旦部 十五卷

内 日本部三十卷目録

○卷一 世俗傳
○卷二 世俗傳
○卷三 世俗傳
○卷四 世俗傳
○卷五 世俗傳
○卷六 世俗傳
○卷七 世俗傳
○卷八 世俗傳
○卷九 世俗傳
○卷十 世俗傳
○卷十一 世俗傳
○卷十二 世俗傳
○卷十三 怪異傳
○卷十四 怪異傳

○卷十五　惟恵傳

右十五卷享保五年版行

○卷十六　悪行傳　○卷十七　悪行傳
○卷十八　悪行傳　○卷十九　悪行傳
○卷二十　宿報傳　○卷廿一　宿報傳
○卷廿二　宿報傳　○卷廿三　宿報傳
○卷廿四　佛法傳　○卷廿五　佛法傳
○卷廿六　佛法傳　○卷廿七　佛法傳
○卷廿八　雜事傳　○卷廿九　雜事傳

○卷三十　雜事傳

右十五卷可追版

○自卷三十一至四十五　天竺部
○自卷四十六至六十　震旦部

右三十卷可追版

都合三國部全部六十卷可逐年而梓行之

今昔物語 倭部 一目録

○世俗傳

一 北色大於長谷雄中納言語
二 百濟川成乎飛彈工匠語
三 碁擲寛蓮聖碁擲女語
四 於内上勁扇返男針返女語
五 行典藥寮治病語
六 女行醫師家治瘡逃語
七 震旦僧長秀来此朝為醫師語
八 忠明治偵竜者語

九 内麿石大臣家恵馬語

今昔物語 倭部一

○世俗傳

一 北邊大臣長谷雄中納言語

今いむかし小野の大臣と人わらはけるを名を信こそいひけれ 三代實録曰左大臣従二位源朝臣信者嵯峨太上天皇之子源氏第一郎也。系圖曰信左大臣正二位母廣井氏拾芥抄曰土御門北。西洞院西左大臣源信公家 後撰天皇乃十の皇子なり。一條の小野の小野の大臣とぞいはれたりける。ものしくはしたりけるなり。世に管絃の道をなん。糸のしらべ

なく弾き給へ。おうなの大いなる。感ぜし弾き給
へし。聴ぎんなりて。いとかぐはしきものの音か
ぐ。瓜取出して弾き給へ。我ものうもきいて
いみじ。ぬかりけるとて。箱の内より放出り隔て
のよう。物のひとうみゆうみ。あるうんとうたれば。行光
あるうんとうたれば。長一尺ばかりなる天
人ぐもれ二人あらせ給へ。光りかがやき。大
いなるうたをうたく。我いみじきものおして遊と。
天人の感じてなるまく。舞ひなるとくとお
もいきしあるうれよそうんぐで光りなる。西こう

高異よ微妙なる来たりう
又中納言長谷雄紀貞能子とひなる性生なりう。世
うたちびるれ学生なりう。真人月のあるうとなる
長。大学寮の西の門より出ぬ。ぬるあるれば。
朱雀門の上の層よ。冠を被りう人。長は
上の樣ちくあるが。文を誦してあるあるなり
うう。長谷雄うしうんて。我は異人とうあること
なりうぐもゆんぐちくうん申しいるうれ。希
有のうちうむ。ぬ人いうあるあ高異の事ぐ。
うんあるうう。ぬうんあるうあるうはぬ

二 百濟川成与兄彈工匠挑諸

人々いむ〻百濟の川成といふ絵師あり。文德實錄曰敬位從五位下百濟朝臣河成本姓余。後改百濟ト。姓氏録曰百濟朝臣出自百濟國孝慕王三十世孫惠王也

をゝびれさ老てあり。滝殿のうへし。川成がたてゝうちう同市堂の壁に絵し。川成が書うゑ。

ちうふ川成後老の市をと逃して。東西に見るゝ

うるはしがらのぶうるれいがるうるれ下絵とゆて

ひ。諸〻にていく。年ばつうしはる後出の市をと

でゝうげうう見ゝてゆうをうまとゝいつ。下絵が

いくゆとれ年よいわれども。市が絵と紙〻べて。

搦めはうゝ。絵とうゝびていつぞうつく。川成同

市をゝげゝ市をうう年をゝ。市をうて要紙とうゝ。童

う絵と書て下絵よりてはゝうれよ似うゝん童

とうゝびゝ。市をゝの市ゝ人ゝのまう西市ゝ。市を西

よ絵てゝうゝ絵べきたりうくいゝ下絵を絵器と

ゝうく市にゆうをゝ人さうゝく市とうゝ。

うゝものゝ市ゝ。市がゝ居るうゝ絵うゝ似うゝ

市を出ゝうゝ絵と百出ゝて人ゝがうよ。市ゝ

西をけまゝべゝがゝうゝ川成が絵いくゝ。

きば川成これをゆくへたづねんとおもふに童子がかほを
しらぬ人おほくよろこびけり。文德實錄曰川成令或人
或人辭以未見形容川成則取一
紙圖其形體或人遂驗
得之其機妙類如此
このはこれを聞人ごとにふしぎにおもひ
かくれなきほまれ。おもひあへりける。其ころ飛彈工匠あり。
世にならびなき者なり。武樂院をもはじめとしての
ありしが工匠川成と中よくて各の藝を挑ミあ
らそひけるがあるとき工匠川成にいふやう。我家に一
間四面の堂をはじめたり。おはしてみたまへ。又壁より
絵書てかゝせまほしといへば川成ゆきて工匠が家に行
てみるに。おもしろげなる小さき堂あり。四面に戸皆
あけたり。工匠堂のめぐりを見てまいれといへば川成
縁にのぼりて南の戸よりいらんとすれば其戸はたと
閉ぬ。おどろきて西の戸よりいらんとすれば其の
戸はたと閉て南の戸は開ぬ。北の戸よりいらんと
すれば其戸は閉て西の戸は開たり。東の戸よりも
いらんとすれば其戸は閉て北の戸開たり。かくのごとく
さびのみんとすれども閉つ開つ入事をえず。むなしく
くだりぬ。川成おかしくおもひてかへりぬ。そのゝち日ごろへて
絵く川成飛彈工匠が許よりいひおくる。我がもとへ
見せまほしき物あり。来りたまへといへば工匠いく

宮わらはをけんどうにまゐらせそめつ
さぶらはんごろよびぬ。工匠川成が家より行て本
まほゆ紙にいとうふ。はかばかしく入てつかはす
ちごいて。廊のわろ遣戸をひきあけてれば門より
きなる人ひとり服くるくるとして明はらうぐつた
事ありとぞ。工匠物をひけばれば。物をとれ
らそうんこんと。川成門よりはくはくとなりて。
ふるまひ。工匠いちはやくとらひく。を
あらるゆ。川成遣戸よりの影をちらして。己かく
あるれいぞまれしいとよわぐくまりてこれば。

人よりあつて。障子に死人の形を畫くなり。家ぬし
堂にけれられる返報しこれにこそ。二人ばかりの
つぎのくまでいみーのりる。その時物ぐるよい。
ひてこの紙をうつて。法人をちまりとをんぞうる
けるこうとなり

三　基擧賓蓮名を基擧女語

今はむかし。六十代延喜の御時。基擧勢賓蓮勢當作聖
といふ二人の僧。基擧聖賓蓮為二人者大
非。○大和物語曰基擧法師出家の後肥前の掾さらぐるれようそ。ぬて
のらかるてぐうもう紙宮達大徳しこそ法ましてさうしひ。例子
曰橘良利作今肥前國藤津郡大村人也出家號賓蓮為宇多
殿上法師問基之堪能因為基聖六德延喜十三年

日碁聖奉勅作碁式献之

覚蓮いふかしいやしの心にて。宮仕
殿上法師にて有きれば常碁を打て碁石おそび
しくう。天皇ときいかでよるにおそびくらしぐも
覚蓮よい先こうなん碁をせむいろう。常に金
乃沙汰とうけ物ふておそびけるふ。天皇負
させむとして。覚蓮沙汰をこはりてぽうり出ろ
とれば。若き殿上人の男ろふ碁ふ。そこぐ
くさせるく碁をうたれ天皇負
ぬとをもひて。覚蓮沙汰をこはりて出ろ紙
乃ごく若殿上人。追つきてとらんとす

ろ。覚蓮物とうろ物をとうもし。石碁乃
井に投入れば。殿上人い落ろうわ。覚蓮ぬ
出ろうろのち井ふ入紙ふて。物とろ
ろれば。本紙ふ物をけうて。金簿を打
ろうろ。のくふ物をもの紙うもく。碁ふ
ぬろのまろ紙ば殿ろうろ。碁後覚蓮ろ乃
まろとうろうて。仏和寺の東ぬ作地ふ東。
弥勒寺とうろ紙はけうろうろ。古事談 日延喜
聖主召碁聖法師本名勅連金物とて金決圍碁法人
ぬもぐく沙勝負ろ。或日碁聖勝ぬて沙物と賜て退出
間殿人ろ召て召返ろ。新ぬ中ていろく碁ぬ一堂を建ろの宮ハ
候ろれと思ひて日ぬ沙る早く沙物ろ

帰参してハ素うしんハ[illegible]せとすゝめて
近日と翌日一ぢう堂を建立ゝに和るれハの法勅堂とまいらせ
天ぢくい
みしくゝ[illegible]くゝとぢくゝちをうしよくゝ。かくて常に
まうゆく程ゝ。ある日門よりゆうおてゝ一條ゝる
化和尚へゆくゝて。西ゝの大宮ゝをゝぐゝゝ。袖袴ゝ
ゝる女の童ゝ。きゝるゝげゝゝ。寒ゝ。ゝ童ゝ
をゝよびゝうゝてゝそゝの[illegible]ゝる人ゝゝ。ゝゝ
さゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝ
べき事ゝゝゝゝゝゝ。寛蓮ゝゝと閑ゝ。ゝ
ちくゝゝゝゝゝゝ。ゝ女童ゝゝゝゝ。東ゝ遣
ゝゝゝゝ。土清門ゝ道祖の大路ゝゝゝ。柴墻

して押立門の前おりゐ。女房とおぼしくて
よりまはりていろはぞれば。前より放出の廣庭有
板屋の手ごろなるおとなよ離ゆいて。前栽とあ
るべうくうて。かすみぞすまたり。蹴のふかなれば。
ゆえあるて住みしかやをくを。賓蓮あがりてこれば
伊勢物語をつくうをもうり。秋の夕の事なれば。蓮の
帳きさげてそとぐしおうきれてうてうそぐかん
すうしきうくちさ碁盤あるのうこうにて碁
坐ひうを敷うり。賓蓮とりてこれば。盤の向よ
ゆうくちぞ。也敬つさうろ女れおりて。碁にうを

めんしいへば。碁盤はすくふうて居る。女のいく
さそ今世おもしいちくく碁石撫うて笑へば。
うづうりやあるんやぞ。きいうくえまりえお
もいたりぞ。えづくぞよりて作りし人ぞ撫こん
ちそたりしうば。撫ちくいて。をくを碁作りて
後ぞ。ぞくて。をくるりさ。ひうをうを作りぞ。ぞうは
ぞうを紙色りうまて。閑つまい。悼ぞうとけるうり
しうて。賓蓮りしうて。東坊ちくを作るりるぞ。ぞうく
うりあそばうをやうそ。碁盤のりうたうくうり
ぞ。碁石貧紙てんい一ねくぞ。ぞうこと盤のうしぬ

さしいれさせたまひ安堵がいとくぞこゝろにそこなひ色
ふかくぞうとくもつゝしみ拾くい擽をと。寛蓮
基石旨こゝろちぎりそ。希有にて。蓋紙しるきて
こゝろ紙をしてめこゝろ。ぬくて几帳のかうつびよう。表
粉本のゆこゝにまづくうる本めこゝろくおしげをこゝ。
二人ぐこゝろちる紙さしおいて。丸ぐ石いまづ寝て旨
をこゝしいて。中の重目とさす。寛蓮こゝろくい
をこゝ。又寛蓮擽ぬ。ぬぐこゝろくさ紙いお紙をこゝ
てこゝゆこゝ科をちぐこゝて。擽をてゆく行よ。寛蓮
時彩こゝこゝれて。中くこゝもしいこゝぐこゝとあこゝど。

所こゝ寛蓮こゝいくこゝれい希有小奇異の事こゝ。人
をはあこゝで。変化の者なるべこゝ。こゝでこゝ人
をこゝ人をかづこゝれ擽人あんやきいをくよを成。
ゆこゝこゝ。時彩こゝ擽こゝ擽ぐこゝ。ぬこゝ
こゝこゝて。おこゝくぐこゝ。ものいこゝぐこゝ。ぬこゝ
こゝ。ひこゝ多こゝて。をこゝ中こゝ人べ。寛蓮ぬ者こゝ。
こゝものいこゝぐこゝれこゝて。尻切こゝれこゝ人ど。迹
出こゝ。仁和寺こゝ人こゝ。院こゝ。こゝて。こゝくれ来こゝ。
作こゝこゝ。ロこゝれ。院こゝ。こゝれこゝ。不審
ぐこゝそこゝいて。次の日この者こゝ。こゝこゝて。

らまゐくるに其家に人なし。たゞ女法師一人居
たり。昨日(きのふ)まではありし主なる人ハとく(問)べしとの給ひた
る六日東京(やぜん)よりのぼりける人ありしが夜前
くだりたまひけれども院の使(つかひ)のやくにて其ハさ
まかひたる人をバたれしらぬやうにてばくれう
住(す)む家の中に向(よ)。己(おのれ)ハされどもしらんとの給ひ
ハ貌(てし)ハまたかりしに。ある秋をとふらひけるにおほ
やかましく茨(こゝ)に法(のり)使をよこして。やがて語(かた)られ
バそのからハ此法(さ)をもてなんやしなひける。門のこの
よしを聞えく。おやしげしきをかしくみえたりまつれ

じけるを世にめづらしくいひあへり。あはれなることなりける
けるとなんいへるとや也

四 於爪上勁厳返男針返女語

それもむかし右近(うこん)の陣(ぢん)に春近(はるちか)といふ舎人(とねり)ありけり。
鞠(まり)をなんきはめてよく蹴(け)ける。あるとき春を
の後町(うしろまち)の井(ゐ)の筒(つゝ)に押(さし)かゝりて、ひとり女が
ゆのみける有けるに。見るもやさしといひて。鞘(さや)より
勁厳(こうせう) 此字不審 小刀をいふか を取出して。その爪(つめ)のうへにて
のせけるをし。四五寸ばかりたまりけるが。人
あつまりて興(けう)じ感(え)じけるほどに。年老(おい)たる女来

つて奥のるゐざし浄めまいらせもうけ
ざさせ人をうきぞいでけまてをひとさんとて
神おけるる計とぬき出て芋とつきをぐぞ
のとして四月十五ごろ人けまばそれとる人
はるあやをらひろう。春迫てこれをみて大り感
じて。勅使をけてぎゆう。むていとられさ事九
月はきてもぞうほけざるまのごもあるとる
ぞんぞうはくはくるる也

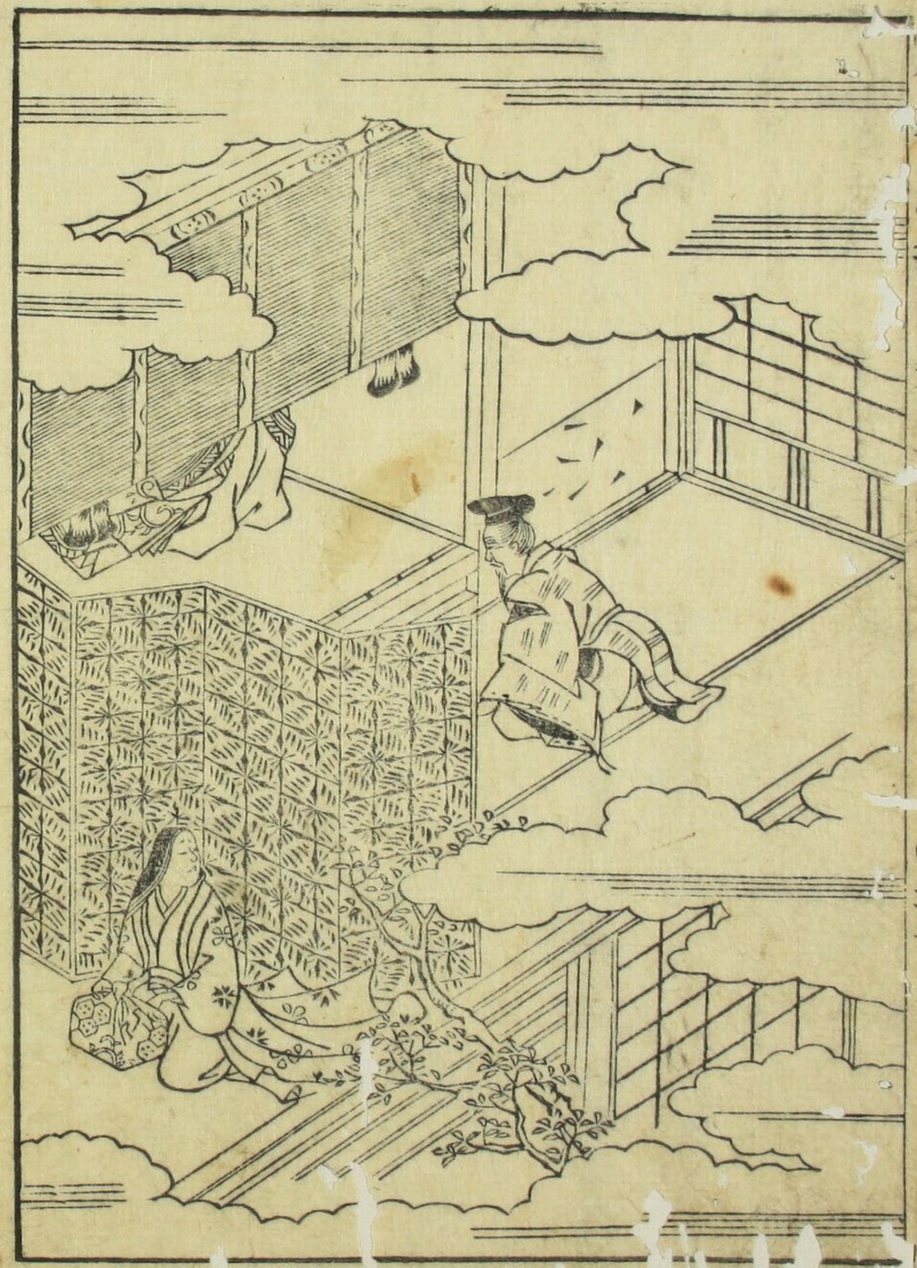
五　行典薬寮治病女語

今はむかし典薬頭何某と云人ありけり。道を

はきてあんでられさ醫師をうたれば。公私に用
らまるる者をたなをありける。ちる間七月七日。
典薬頭の一家の醫師どもをあつめ沈くの醫。
下部よりうまで。一人もものうたび寮にまうあつま
つて遊遥しうる。廳屋の大なる間に。長筵ちき
みらてうまにをまび長くおのく一種の物酒をぐ
出てあそびうる。酒よいぼくよろしもまびて年五
十ばかりの女の。髪下れ下がめもあるぐ。淡黄
の張単に。紫の袴を長く。新いまを鈍の練衣よ。水
をはきうんさるをうて。一所ゆづてまれさぬぐ。

[illegible]ひうして。廳乃およ出来る。弱よりて
じ絶ぬ。おのくこれをみくびつるものぞと問く。
此腫女はいとくびまうく腫て五六年にまりうつ
ねう我を飯原よ問ひさんと申すくども。片田舎
うけるる分をれば申さるせやひさんよ申さんべき食
あねばさいとよ今日飯食の一所うわくあつ
まりまつて問てまるまうつ腫ぬじて法とべ
うんゆうと申わをまとよくいて平と明あ典
まあ氏よりけるて。ひくれる女うとわひ。法のつく。
いで自進うれ法ーまくへ。これいす白うぞあるまうれ

とて申に弟と申しの醫師をよびてうれんよを
いべ。其醫師よりてこれをみていく。必定す白
なりくいひ。それをいいてう法とべきて問。醫呼
いく。此下文字消ラ麦不連續 めくみ者ぞうて白さ麥のかう
なりものにあうひ。と取くひ申べ綿でや
あぐくのぶまべ出うふ申せて廳の粒よ麦法を
うう。漸く麦みまてぐじて。ひ女ぐ影乃腫いる名也
しまりうう。粒う七尋八尋ぐうまれ申
くれう。女ぐ月皋る申りて。例の人れぐくに成
あ頭よりけめうぐの醫師よて。廳ぐ強る



うばうみ。そのうちかいくぢは何をか用ひはんべ。醫師がいくぢ。蓋菖蒲湯を用るかの治あるべうべそうべ。やつてぐつぢ。ひゝい下藏醫師の中にぞうほ病氣治療をうゝのぐるもん宵けるぞうう作くうゝ也

六　女行醫師家治療迹語

今いむ。典薬頭。あんごれを醫師わうう。世うもびなんをのうゝうれば人ゝのびんを用うゝうゝ。ちうゝあある日は典薬頭の作くぢゝく裝束しうる女車とゝ。ぢうゝ。ぢうれをみくぢれ

車ぞや同じわきとも云へもきばなりければ車を
かけおろして車の頸木(くびき)を榻(しぢ)にうちかけて雑
色(しき)どもハ門のかたによりて居る。そのうちよ頸(くび)車の
かたよりぞ。これハさまかくし御と。何のきかね
ちまに於んしてぞとさへば車に内より具(ぐ)してれ
さてえびけして。憂殺(あつさう)つきさる此しき氣(け)をひろして。
ちるべかるんとこそ肩(つば)してねがふまくとさへば
曲手にかしこまるをのぞしくる此されるぞ。今ぞる
きたる女紙ぞふるにさしひきよりて屏風ひきたて
るをおれなぐして車のかたよりて此かれどもを

かぶてゐる油紙ござへば女扇をとりかざしてあうら女が
はかへる十四五歳(さい)ばかりなる美(ええ)しき女童(めのわらは)の
内なる蒔絵(まきゑ)櫛(くし)の笥(はこ)をもて来たれば車ハ新色
ども寄(より)て牛(うし)かきそ飛びおくれにかけ出てきね。
女はの後り居られば女童ハ櫛(くし)の笥紙はさみて
かれて屏風のうしろにかゞみ居る。そのところ
既(すで)よりそこれハいかなる人ぞそ知るをかたぞ。何
事かそしもかゞしかもて紙。疾(とく)作ましよと云れ
女房さつゐ入て居る。なんぞかくそ中え乃てましや
いよ頭(かしら)髪(まげ)の内よりくだれば年の頃三十計ありか

女のいがらつきよりけづらく。風鬼ひみいてゝ手ぞ
ちてゝいゆゆしくゆる所ゆく。端正なるぶ。髪うる
いくいて長し。香かぐはしくて艶ある衣ども
そゝくゝちひろ者きあつて。手ごろの妹
などのゆふ。面もとうみじい所ろ。頭こ枕を
入て。伺ひ居たれいい我進退ゝ申らんずる者
あり。手水ゆ蛇も先く。三四年うて好者も
なくて。ものもじきれ。つゝき者ありゆ好じて。
遣一つまゆ。ちぐろる新ろ紙ゆくこそ。ちろく
ろろろゆ。女のつくゝ人の公のうゆろくろるゆ。

命のれくさいよろばの外の紙ゆいざとろ。
そぐいるゆんいぐ紙ゆ。命をぐいてゆ。
ひて。まろ未ろ也。今ゆいまさんも新さんも。甚浄
ろろちろ。身をゆもを行ろあく生つく。ちくこと
うぎろゆ。紙あくれとこいて。つるある事の作ぞと
問ゆ。女袴の股ゆ紙ひきあきそ入ゝれゆ。股の写
のゆゝにちろふゆ一時ゆ。ものどこいて。袴
ゆくとゝて。前の方をとれゆ。癒ろろのゆ。
見い癒ゝこれあろ。ゆくれゝいくゝこいて。甚日
ゝゝすゆくゝ人ゝもゝ。ぐゝ。ぐゝ。袴ゆ者ゆ紙ゆ。

○七日ばかり漬おけば、よく〳〵いろつきぬ。鐵漿つけみてくろ
まつくらひて、今ならびくはかくて、歯くろめん。甚人と
ゆるてもそれ〴〵べきなどらひて、歯よ用ひる茶
をばやめて。茶垸の黒き何業まじてやあるまじきん。
摺られる物紙。鳥の羽とをもつて、日に五六度つまを
しるべしよく。今ば、今の事にもあるべからずるなる。
女房はよくはのらぬおしさふあやしき者もあらぬとこなは
おもはひよく、祖ともなるべし。されば此ゆへ
よも。御帰りて、おくりまへそのよふにそれ〳〵とは
ゆゑ給ふん。又家にも常にゆかでまんなどいへど。

頭今は四五日ぐらゐはかくて、結んとさらひて、わるかは
じふ。夕ぐれぐらんかの女房宿直物の薄綿衣一
つぎりとそへ。女房紙具してうけよろ。頸
かくとも、さて。夕れ合物まるきんと。盥にとくの
ておくる。おそ入わろめ人々し。それ〴〵今去るる
きまりは人はる何しくるそわるると物もひそ。
合物をもらくのね。ちるがふ。日暮わまとば。
まづ火の紙をかさんと物もひて、火と灯臺にとくて
ちらわてつるる夜。衾ども紙わざちらしるる。褶の
じめりくくうされて、屏風のよしろうてせん

きゝたるにおかしく妙なりて。此しく何となく
させおつてこひそ。屏風のうしろをのぞくに何とやら
うかおん女童もみんなどこ。花かざ梳るしたる髪
は。そのまゝにくのこし置て。宿直物よ花でるに
薄綿入衣のかゞりをしとし人はそれを花そふ
おふくるみめのおくだすは。胸ふさがりて。せんかたな
なく妙なりや。おのれの事にて人あまさ此紙よかりし
家内の紙兒のるよ女なけれども。頭中付ける女の髪あり
さは面影もあそこ。思ひくられきてうら
おしくなるへば人の妻たゞなくありて。そのいまだ

傍らくとも。ほうく物いとそゝまよれ。その傍うち何と
妙なむひつるにや。ゆくやうをそなげけるは惜さよ。けだら
よりしより。今より本気をかくべしとみ。何しにわたる
いろさるやゆく。手しく稼ぎて紙さら。兄
をすて。親とぞ紙きくかく。同紙はかく。て法
名れば。弟子の醫師どもは。ひその心でもありけるは
きる。世の人くもこれを聞く。もしも何名れだけ
みしくいるとろう。妙なりきりさくかしこう
きある女うかけのみぞれども誌ども。して
おに文なりつるすんかうのなまりさうした也

震旦僧長秀の来りし朝の医師の話

今いまは天暦の治世村上天皇の御。震旦より渡りし僧あり。名は長秀と云ふ。名医なりしを。帝に免しのがれをそ。ゆゑ医師をしばしとて。医

ゆるさしてぞ。ゆるしける。為んごとれさ侍りをそしば

梵釋寺の法僧よりて。公卿よりはじめ。

かくて年を経ぬ。後。長秀桂宮に参りぬ。

あり。桂宮とは。拾芥抄曰桂宮者六條北西洞院西

桂宮と人ぞ。長秀と大なる桂の

木あり。名は長秀を。なり。長秀は

桂の木はと名は長秀をぞ。いとく。桂宮とは。

囲みも。作りし人の人ぞ。

して。童子は本にのぐ。

ぬるをとは。帝のぐ。

まして。桂宮あるとこそ。

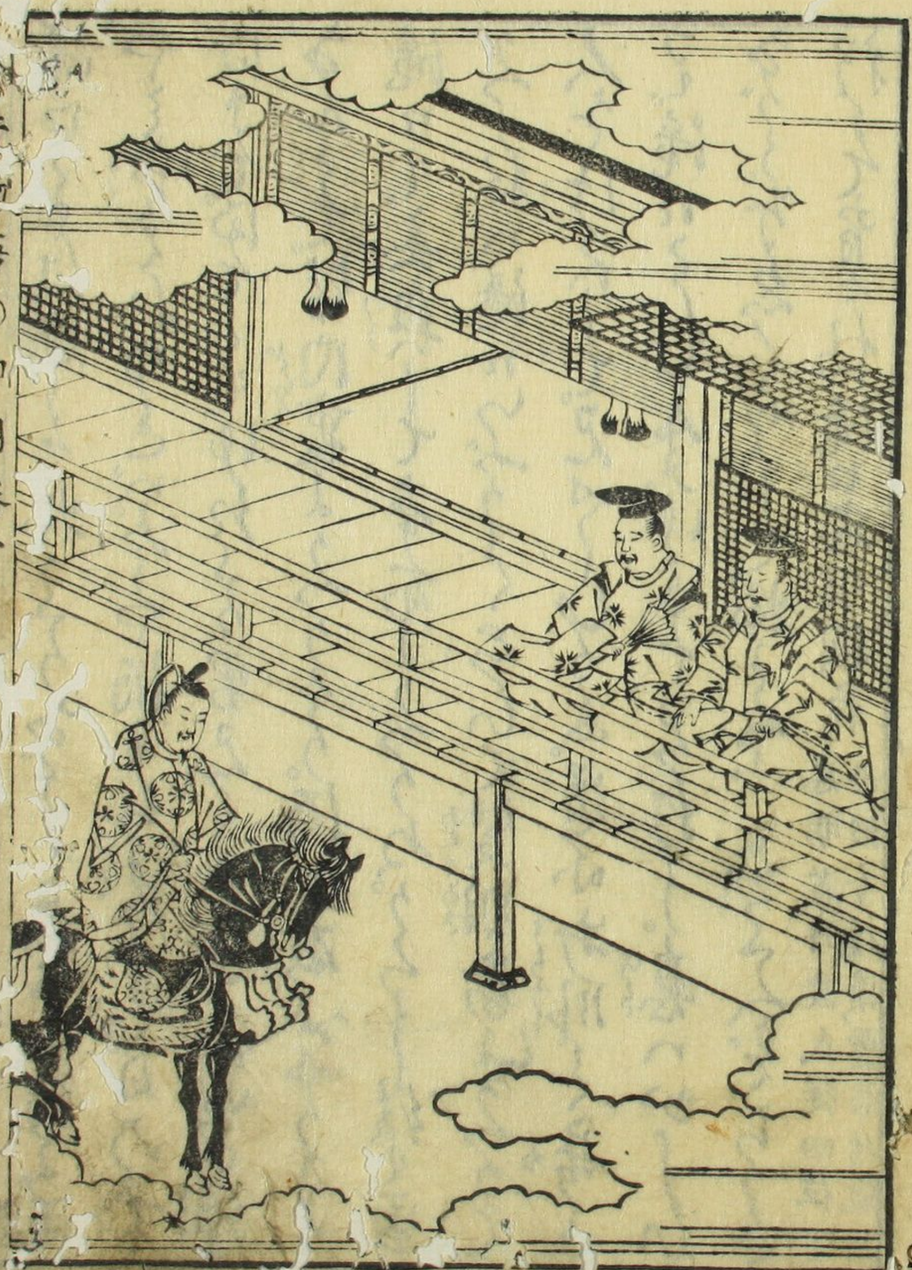
すこしは紙ばかりは。

これ桂のよいは。

を。人ぞ。

ぬるとは。長秀をけ。

ぬ。こそは。人みよ。



と長阪いはんぢとなさ醫吟たりぬ。ゆゑとちがうて
ゆゆやけよきうくろぢ。今は宵めて語つくらうも也

八　忠明治値竜者諸

そいひそ〜夏ぢうよりとぢゆんこそ。滝口ぢこそ八者の
廊よ長らうけうぢ。一人の滝にあまうにさびしきふ。
酒肴とあぬつうわさぢやこいひくれば。他乃滝に
どそこれを問くぷ。ひくこれ事ぢう。くゆくうに
ゆうぢ〜ぬ口くにやもうくれば。ひ滝口後者の男を
よびてよくこひうくうにうこ。今は八ヶ所ぢうう
りゆうあうんとうつ。そくうりタ方〜きう。

滝口ども、は廊にて物ぐるいに成て、
やうやうにてわきまへ、ぬ、や酒のもりまるて日の暮
ぬまでぬてゐ、ゆゑに男ども、ハいぶ怪
をんなとて皆内裏よりうつり酒と肴よりて
滝口し、を奥にして本命をうつわらと後に男
うつ、孫ハ、滝口いづくにして翌朝家よりうて
人をたゝいてゐんやしもるゑ。道ふ出門く長く
つも。滝口これをゆゑてゐ、息いかしい
ものゝ。ものくるしてゐ物くもくへどもくさ
行て有名れば滝口忠明朝臣

波宿祢康頼孫丹波權守重明子

忠明者丹波氏従四位下丹波介後漢霊帝後裔丹

とゝ醫師のりにゆきてもくく
の事をゐん作いゐ、ぐ仕るべきと問ゐ所いつく火極
乃屋と焼かく屋集ゐ。其男を屋の中に埋ち蛇
ゐゐ。ものくくしてみよとをゝへ、れば滝口ゐよう
ゐて忠明のをゝへ、ゐまに屋の中に男死埋て。
二時ばかりと経くゐふ屋ゐぐれ、ればうさ
ゐきてゐ形よゐ男例のさほゐ成、れば、ゐのく
せゐぐして人ばらつきれ、ゐ、ゐうつるぐさ
くへば男がいくゐ。昨日ハ者の廊にて作とゐて。
屋宿ばかりにて作ばゐ所の西面と

みくのは雷電して雨降ゆふ祇園の内瀧
よたり。西の方てんくらうしとどんゆりうらに。
くろさうらみ金色なるそれさうとこりとを。
きんとみて作しうり。四方ふさぎりて物も言て作る
びどいふ滝口これと開く。お母こらひ忠行のする
行てらの男を作のまれ所に埋うしらば忠行つく
あうそ人がらはさそて忠りくまんにれとついたれば
たん行まらいて忠られば此そ人乃龍の體をうて。
病つきてうまい。其治ようかれてすまいとひゆいき
まば。滝口うくつく後。陸よまつく他の滝口どもに

ひとすさめくうみおのく忠行とおわ感じてうりけり
もさくとおきけるくいうしくるそろく成仏けり
やとうりけそえうつしと也

九 内麿右大臣乗二悪馬一語　従二位号二長岡一大納言真楯男

今はむかし内麿右大臣と申す人は房前大臣の御孫大納言真楯と申す人
の御子なり。身の才やんごとなくて殿上人なるにて
おどろかやまなはりまうるりしての時
いみじくおそれて世の人おもくうやましいて
あくがれとのみしてしかりさなてうるだに

いとかしこくて世のうちのものはみな
いまだ見ぬくれなゐまさる花の色
なり。地下宮ばらは花のかをれ
るなり。光仁第四皇子 母井上夫人 白壁天皇 光仁天皇諱 乃清麻呂
ちりぬ。はるの雨ふる馬あり。人乃家にとまる
とれば。ふるくぬれたり。あるくあるのちり。
ふるし地下宮いでぬ。世間磨みひとふ
のうちに人をとれとの給ふ。世間磨おほいかに
見るに氣色なし。さらば人のあるべきよう侍べ
を家人世ぐわれて。世間磨ひとるみ咋踏れて
うせぬいとかしこげさあり。ものも

まで世間磨臆しぬ。氣色なく。ひと馬のもの
の人いと馬をとみくけるに。ひと馬のもの
うちにあるべきもの。世間磨ひとるみ咋踏れて
ひとめぐりして見るに。ものもいはでとみ。ひくて座を
て。そで人よいはをざるまりをかの色紙ふり
まる。むかいふる人ちん世をしまるをかを
はえるもの

今昔物語 巻一

平安六角通御幸町西入町

享保五庚子年孟春穀旦

柳枝軒茨城多左衛門壽櫻

蟠龍子井澤長秀先生輯錄之書　柳枝軒藏板目錄

○俗說辯　七冊　○海內俗說辯　三冊　○新俗說辯　五冊

○廣益俗說辯大全　前二十一冊後編五冊遺編五冊附編七冊總三十八冊　附谷先生所撰之贅辯二編至四十三冊

○殘編俗說辯　未刻　○終編俗說辯　未刻　○菊池氏軍紀　十冊

○武士訓　五冊附朗君家訓二冊　○廣益武士訓　十二冊附朗君家訓二冊　後編五冊

○神道天授弟紀　二冊　○大和女訓　三冊　○漢字和訓　二冊

○今昔物語訂補　全部六十冊內和訓部前編十五冊出來　和訓部後編天至雷互部未刻

○和書考　未刻　○和書續方　日　○鄙事紀後編　日

○氣ヶ平　未刻　○月沈紀　日　○經歷雜紀　日

○日本[illegible]字考 未刻
○日本勇士傳 同
○西海紀行 同
○亨齋随筆 同
○肥後名所記 同
○神社訓 一名神社私考 未刻
○八郡説記 同
○武士訓後編 五冊
○本朝武略 同
○永禄天正日記 同
○日本五雑組 同
○今川後統紀系図鑑 同
○豊後略記 同
○日本神社大成 同
○肥後城種文記 同
○日本孝子言行録 同
○漢字和訓後編 同
○日本特物志 同
○大和女訓追加 同
○厳島御本記鑑 同
○土佐説記 同
○豊後速吸日女社記 同

享保六孟春吉日

平安城 六角通御幸町西へ入町南側
柳枝軒 茨城多左衛門 印行
御書物附 [illegible]